

琉歌における季節語（春夏秋冬）をめぐって

コメニウス大学人文学部東アジア学科

ヤナ・ウルバノヴァー

1. はじめに

沖縄の文化、とりわけ琉歌という歌と初めて出会ったのが2002年。琉球大学に一年間留学した時である。まだコメニウス大学の学生だった頃、スロバキア人教授の講義で語られる沖縄の文化に魅了され、興味本位で日本語の研修生として一年間の留学に飛び乗ったのがそもそもの縁である。その間、沖縄の伝統的な楽器の三線^{サンシン}や代表的な歌である琉歌に触れることができ、短いながらも日本であって日本でない、かなり独特な文化を心ゆくまで堪能した。琉球大学での留学を終えて数年が経過しても琉歌熱は冷めることがなく、さらに本格的な研究を志すようになり、再び私は日本に戻る決意を固めた。文部科学省の奨学金に応募し、運良く法政大学の留学が決まったのは本当に幸いである。同大学の間宮厚司教授のご指導のもと、琉歌やオモロ、和歌の知識を深めながら、出会いから10年の歳月を経た2013年に同大学において日本文学の博士号が取得できた。研究の成果は『琉歌の表現研究—和歌やオモロとの比較—』というタイトルの博士論文にまとめられているが、和歌やオモロとの関係、表現の使い方、琉歌の成立や影響に伴う多々の謎について不思議に感じる点がまだまだ多く残っており、興味が絶えないばかりか、研究者の端くれとしてようやくスタートラインに立てた感じさえしている。

琉歌は沖縄本島で生まれ、琉球諸島や奄美諸島へ普及していった歌である。和歌と同じく定型化された叙情歌であるが、その基本的な形式は8・8・8・6音の4句で合わさる30音から成る偶数の音数律である。そもそも琉歌は口承伝承の歌であるため、その成立時期には諸説あり未詳であるが、1683年¹という琉歌に関する最も古い記録からすればすでに17世紀後半には確実に存在していたと言える。また、琉歌の起源問題も、大きくわけて二つの説に大別される。その一つ目は薩摩藩が琉球入りした1609年以降、琉球王国が薩摩藩およびその他の地域との交流を通じて日本本土の文学的影響を受けていた中で、琉歌は基本的に本土の小唄に影響され成立したという説であり、田島利三郎、世礼国男、小野重朗などがこれを支持する。もう一つは、琉歌は昔から琉球で伝わっていたオモロという叙事的な神歌を母体としながら、琉球文化の独特のものとして自立したのだという、伊波普猷、仲原善忠、比嘉春潮、金城朝永、外間守善などの説である。後者は、前者の後に出了された説であるが、現在通説となっている。(比嘉実1975)。しかし、これらの二つの説は、主に歌の形式に焦点を当てながら琉歌の成立について論じていることに注意しなければなら

¹ 1683年冊封正使の汪楫が、琉球人によって作られた琉歌の形式を持つ歌4首が菊花・松・竹の絵と共に揮毫された屏風一双を、土産として持ち帰ったという記録が座間味景典の家譜に残っている(池宮1992、嘉手苺2003)

い。

表現の観点から研究を行ってきた立場からすれば²、琉歌は沖縄のオモロより和文学的な影響、主に和歌における表現の影響のほうが強いと感じる。特に季節語が詠まれる琉歌はその影響が大きい。

ただ、琉球諸島は日本本土と違い亜熱帯地方に位置しているため、季節もはっきりと区切られた本土の四季とは多少異なる趣がある。沖縄の季節は、主に夏と冬に分けられ、そこに沖縄風土の独特の時期である「うりずん」³や「若夏」⁴が夏前に加わる。それらの季節は全て、沖縄の最古歌謡集『おもろさうし』⁵に編集されたオモロという神歌の中にも見られ、昔から人々の生活に浸透しているが春や秋では決して、ない。しかし、同じ沖縄で歌い続けられてきた琉歌の中には、沖縄の伝統的な季節より本土で広く親しまれている春と秋という表現が数多く反映されている。亜熱帯気候を有する沖縄で昔から暮らしていた人々はなぜ琉歌に春夏秋冬という日本的な四季の表現を託したのだろうか。その主な理由としては、和歌由来の表現の影響が挙げられる。

本稿では、まず、琉歌における春夏秋冬の使用率やそれらの表現と呼応する動詞、名詞等との関係に注目し、琉歌を中心に、オモロと和歌との共通点と相違点について考察する。また、季節語を詠み込んだ琉歌の中で、特定の和歌およびオモロを意図的に作り直した琉歌、いわゆる改作琉歌がどのくらいの割合で見られるか、また具体的にどの和歌集の影響を受けているのかという問題についても指摘したい。最後には、和歌の影響によって沖縄の日常生活から掛け離れた四季の内容を詠んだ琉歌が多く存在しているにもかかわらず、中には和歌的な表現が沖縄の人々の考え方や生活様式と結合した琉歌も見られるため、これらの特徴を本稿で紹介し、日常生活に焦点を当ててその関係についても言及したい。

四季を歌った琉歌に関しては、和歌から琉歌への影響の指摘がすでに先行研究でなされている（外間、仲程 1974、島袋 1995、嘉手苺 2003）。特に嘉手苺の先行研究では「桜」「梅」「菊」などのような表現が分析され琉歌や和歌における意味のニュアンスに関する指摘がある他、『古今和歌集』とそれに倣った『古今琉歌集』に見られる春夏秋冬の使用率も比較されている。また、和歌やオモロの改作琉歌に関しても様々な指摘がある（外間 1965、中原 1969、金城 1974、世礼 1975、池宮 1976、嘉手苺 1996）。先行研究における文学的なイメージの分析や特定の歌集の表現比較研究だけでなく、改作琉歌の数例の紹介も大変興味深く、さらなる研究に貴重な知識を与える。しかし、季節語をめぐる歌の広範囲の調査はいまだなされていない。そこで、本稿では特定の一つの歌集や歌の数例に限らず、以下のテキストに収められる全ての琉歌や和歌、オモロを中心に徹底的な調査を行った上、本稿

² 研究結果はとりわけ拙稿（2015）『琉歌の表現研究—和歌・オモロとの比較から—』に含まれている

³ 旧暦3月の候。秋冬の乾季が過ぎ湿季の初めに黒土が潤う頃をいう（『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』、98頁）

⁴ 『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』によれば、初夏（旧暦4・5月の頃）を意味する

⁵ 1531—1623年にわたり琉球王国の首里王府によって編纂された沖縄最古の歌謡集である。22巻で、オモロを1554首含む

の研究目的に答えることを試みた。琉歌については、『琉歌全集』および『琉歌大成』、オモロに関しては、『おもろさうし上・下』を用いた。また、和歌に関しては、『国歌大観』を活用し、それに加えて『明題和歌全集』や『類題和歌集』も適宜参照した。

2. 琉歌、オモロ、和歌における季節語の使用率

まず、琉歌と和歌における「春・夏・秋・冬」という季節語が詠まれる歌数と、その割合を示した以下のデータを対照にしながら、比較を行いたい。

表1

琉歌における季節語の使用率（順位） （計 415 首）			和歌における季節語の使用率（順位） （計 5499 首） ⁶		
1.	春	43%（178 首）	1.	秋	49%（2700 首）
2.	秋	31%（129 首）	2.	春	36%（1998 首）
3.	夏	14%（60 首）	3.	夏	8%（429 首）
4.	冬	12%（48 首）	4.	冬	7%（372 首）

春と秋の順以外には、両歌における季節語の使用率の順位は同様の傾向を示すと言える。また、その似通った傾向は次のデータからもさらに明らかになる。

表2

同様の傾向			
琉歌における季節語の使用率		和歌における季節語の使用率	
「春」 + 「秋」	74%（高い↑）	「春」 + 「秋」	85%（高い↑）
「夏」 + 「冬」	26%（低い↓）	「夏」 + 「冬」	15%（低い↓）

和歌、琉歌共に、「春」と「秋」を詠み込んだ歌の割合は、「夏」と「冬」の使用率より遙かに高いことが分かる。琉歌の場合は、前者が後者の約3倍、和歌の場合は、5倍以上となっている。嘉手苺（2003）も、『古今和歌集』およびその影響を受けた琉歌の『古今琉歌集』（小那覇朝親編、1895年）を対象に、春夏秋冬に分類された和歌と琉歌の歌数を対比している。その結果、『古今琉歌集』では春→秋→夏→冬となるのに対し、『古今和歌集』では、秋→春→夏→冬という順になっている。さらに、『古今琉歌集』における春秋の歌（189首）が夏冬の歌（94首）より2倍ほどあり、『古今和歌集』における春秋の歌（279首）が夏冬の歌（63首）より4・5倍近くある、という結果は、範囲を広げた本章の調査結果と同様の傾向を示す。

それに対し、沖縄の最古歌謡集である『おもろさうし』のオモロにおける季節語の使用率の状況はどうなっているのだろうか。（次頁の表3を参照）

まず、季節語が詠み込まれているオモロが非常に少ない。さらに、「夏」と「冬」のみが歌われており、琉歌と和歌の中に特に多く見られる「春」と「秋」という表現はオモロには一切

⁶ 『国歌大観』にある季節語を詠み込んだ和歌が数万首を越え、その数が極めて多いため、2. と 3. の章では調査対象とした和歌は、記紀歌謡、万葉集、主な勅撰和歌集、定家・為家・頼阿の主な歌書や主な物語の歌に絞った。選択理由については拙稿（2015）137-138頁を参照。

見られない。琉歌と和歌の状況とはかなり異なる結果となっている。

表 3

季節語を歌ったオモロの歌数と割合 (%)		
春	0 首	0%
夏	9 首	69%
秋	0 首	0%
冬	4 首	31%
計	13 首	100%

3. 季節語と動詞、名詞との組み合わせについて

表 4

琉歌における季節語と動詞との組み合わせ					和歌における季節語と動詞との組み合わせ				
順位	季節語	季節語を詠み込んだ歌数	季節語が動詞と呼応する歌数	季節語と動詞との組み合わせの使用率	順位	季節語	季節語を詠み込んだ歌数	季節語が動詞と呼応する歌数	季節語と動詞との組み合わせの使用率
1.	春	178 首	69 首	39%	1.	春	1998 首	642 首	32%
2.	秋	129 首	41 首	32%	2.	冬	372 首	114 首	31%
3.	冬	48 首	11 首	23%	3.	秋	2700 首	694 首	26%
4.	夏	60 首	12 首	20%	4.	夏	429 首	67 首	16%

琉歌、和歌共に、「春」と動詞との組み合わせが最も多く見られる。また、最も少ないのは、「夏」の歌であり、「夏」は名詞との組み合わせが目立つ。「春」/「夏」の動詞との組み合わせを比較すれば、両歌とも「春」が「夏」の2倍もの高い割合を占める。さらに、2番目と3番目の「秋」と「冬」の順位を除けば、季節語と動詞の組み合わせに関しても、琉歌と和歌は同様の傾向を示していると言える。

具体的な動詞・名詞を分析すれば、「春」を詠んだ琉歌、和歌共に動詞として「来る」が最も多く見られる。さらに、両歌共に「春風」「春雨」「初春」という表現も多く共通しており、それぞれの歌の中で5-10%程度の割合を占める。しかし、和歌の代表的な表現である「春めく」「春立つ」等が琉歌には見られず、その代わりに「春に浮かされて」「心が浮きやがゆる春」という琉歌独自の表現が詠まれる。さらに、和歌の場合は、動詞「来る」が「春」だけではなく、「夏」「秋」「冬」との組み合わせの中でも最も多く使用されているのに対して、琉歌の場合は、「春」のみが最も高い使用率となっており、和歌と相違している。「夏」の場合は、「夏」+名詞というパターンが著しい。両歌共に「夏の夜」「夏の日」「夏の衣」「夏虫」「夏山」等がその典型的な例であり、両歌の大きな共通点として挙げら

れる。「秋」と動詞との組み合わせに関しては、「来る」「暮れる」「行く」「なる」「知る」等のように呼応する動詞に両歌の共通性はあるが、出現頻度の順にははっきりとした関連が見られない。両歌共に「秋風」や「秋の夜」が目立ち、「秋の夜のお月」が「秋の夜」を詠んだ歌のおよそ半数を占めることで両歌が共通している。最後に、「冬」と動詞との組み合わせに関しては、琉歌と和歌の間ではあまり顕著な共通点が見られない。その理由の一つとして、和歌にさほど影響を受けていない「冬」を歌った琉歌には悲しい趣がある点が考えられる。他の季節語を詠み込んだ琉歌とは違い、「冬」を歌った琉歌は「つれなさ」「つらさ」「さびしさ」という語を多く含み、「冬」の琉歌全体の3割に達する。その理由としては、沖縄では冬の間、雨の多い、寂しさを誘う天気が続くからだと考えられる。雪ではなく、霰と時雨しか降らない沖縄の冬が、和歌で描かれた少し遠いイメージを与えている「春」と「秋」と比べて実際の沖縄生活に浸透しており、琉歌にそのまま反映されているのである。

一方、オモロにおける季節語と動詞との組み合わせはどのようになっているのかといえ、前述のようにオモロの中に「夏」と「冬」という季節語は見られるが、「春」と「秋」は一切見られない。さらに、「夏」が歌われているオモロ9首のうち、5首の中には動詞「立つ」(7回)、「知らず」(2回)や「判らず」(2回)との組み合わせが見られ、また「冬」が歌われているオモロ4首のうち、2首の中に動詞「知らず」(2回)と「判らず」(1回)の呼応があるものの、琉歌における「夏」と「冬」はそうした動詞と結ばれることがないことが判明した。さらに、琉歌の中にも、オモロの中にも、沖縄の独特の季節「うりずん」や「若夏」が共通して見られる。しかし、オモロの場合は、「うりずん」⁷が「立つ」や「待つ」と呼応し、「若夏」が全て動詞「立つ」と呼応しているのに対し、琉歌の場合は、「うりずん」も動詞「なる」のみと呼応しており、また「若夏」が動詞「なる」や「巡る」と呼応している。琉歌とオモロ共に共通して見られる沖縄の独特の季節表現「うりずん」・「若夏」と動詞の組み合わせに関しても、琉歌とオモロとで一致していないことが判明した。

オモロは昔の生活や人々の常識を反映しているため、そもそも沖縄にあった季節「夏」「冬」「うりずん」「若夏」のみを詠み込んでいる。しかし、オモロは琉歌のように叙情歌ではなく、叙事の神歌という特徴を持っているため、季節語を詠み込んでいても、叙情的な季節感是非常に薄い。後述のように、琉歌にも影響を与えた「夏」と「冬」を詠み込んだ特定のオモロが1首存在するが、季節より昔の英雄に焦点を当てているため、前述の動詞・名詞との組み合わせのみならず、季節感を重んじる琉歌の叙情的な特徴にもオモロの影響は少ない。

4. 改作琉歌について

動詞・名詞との組み合わせの分析から、琉歌への影響はオモロより和歌のほうが強いことが判明した。琉歌への影響の具体的な程度をより明らかにするために、本稿の研究対象

⁷ オモロでは「おれつむ」「おれづむ」「おれつも」表記

にした琉歌の中で和歌・オモロの改作琉歌がどの割合で見られるのかについて詳しく述べたい。

まず、改作琉歌とはどんな歌であるか。先行研究では様々な用語が用いられるが、嘉手苺(1996)の論文のみでは「改作琉歌」という特定の名称が見られる。しかし、その定義については言及されていない。筆者は、特定の有名な和歌を意図的に倣って、同義語・類義語を用い、同様或いは近い内容を表し、その和歌が詠まれた言葉を沖縄古語に変えつつ琉歌の形式に合わせたものを和歌の改作琉歌であると理解し、定義したい。⁸

本章では、春・夏・秋・冬を詠み込んだ改作琉歌の例を挙げながら、季節語を取り入れた琉歌の中には改作琉歌がどの割合で含まれているのかについて報告する。

「春」を詠み込んだ改作琉歌

和歌

『古今和歌集』(24) [歌人：源宗于朝臣]

ときはなる

松のみどりも

春くれば

今ひとしほの

色まさりけり

琉歌

『琉歌全集』(76) [歌人：北谷王子]

ときはなる松の (トウチワナル マツイヌ)

変ることないさめ (カワルクトゥ ネサミ)

いつも春くれば (イツィン ハル クリバ)

色どまさる (イルドゥ マサル)

琉歌の現代語訳：ときはなる松は、とこしえに変ることはないだろう。いつも春が来れば緑の色がいよいよまさるばかりだ。

改作琉歌の中には和歌の表現⁹や内容が多少変更される点のみならず、和歌の5・7調の形式が琉歌の8・6調の形式に変形される特徴も見られる。この琉歌は特牛節^{クティフシ}と呼ばれ、後述のように琉球古典音楽の代表作となっている。この改作琉歌についてはすでに先行研究の指摘がある(外間1965、池宮1976、嘉手苺1996等)が、本研究ではそれ以外の改作琉歌も新たに指摘し、「春」を取り入れた琉歌178首中に改作琉歌が計19首あり、およそ11%占めることが分かった。

「秋」を詠み込んだ改作琉歌

和歌

『古今和歌集』(215) [歌人：猿丸大夫¹⁰]

おく山に

もみぢふみわけ

琉歌

『琉歌大成』(4167) [歌人：故津波古親雲上]

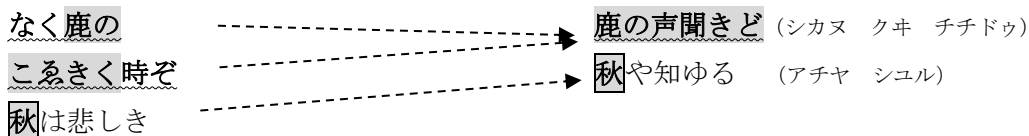
深山住むならひや (ミヤマ スィム ナレヤ)

紅葉ふみわけて (ムミジ フミワキティ)

⁸ オモロの改作琉歌についても同様に定義したい

⁹ 和歌とその改作琉歌における同様・類似の表現を下線や網掛けで強調し、その影響を矢印で示した

¹⁰ 歌人は、藤原定家の『百人一首』に依る

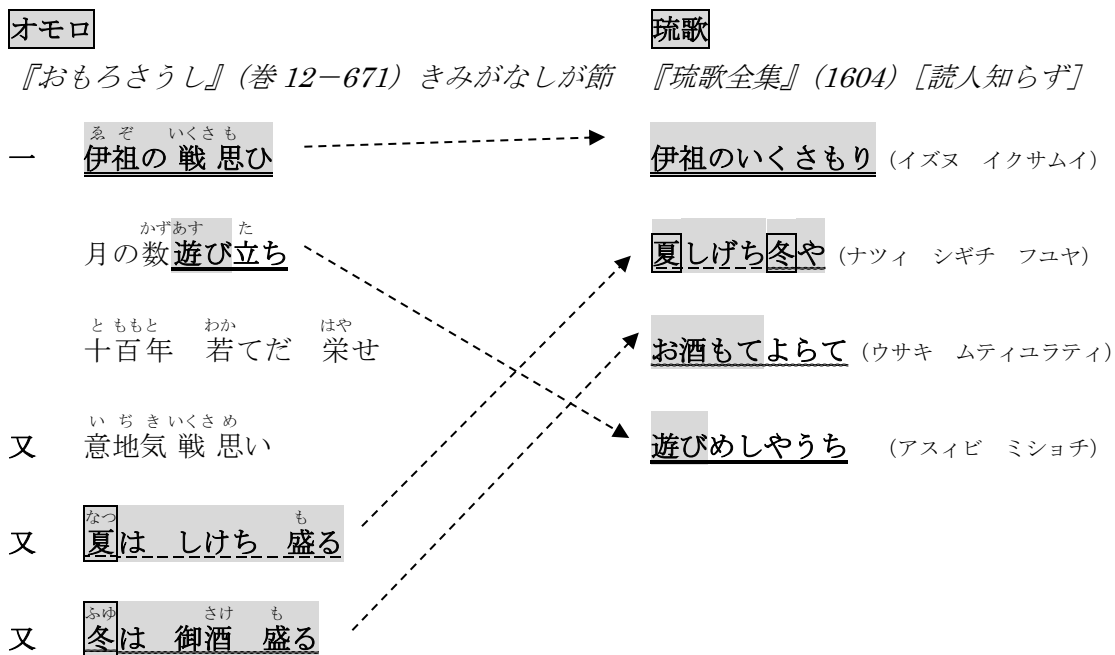


琉歌の現代語訳：深山に住む者は、紅葉を踏み分けて鳴く鹿の声を聞いて、秋を知ることができる。

この有名な和歌の結句「秋は悲しき」が琉歌の中で「秋や知ゆる」として取り入れられている点は興味深い。沖縄では秋が体験できないため、和歌の「秋は悲しい」という表現を省き、「秋を知る」という内容を詠み込むことによってこの改作琉歌は沖縄の人々のためマニュアルのような役割を果たしているように解読できるだろう。なお、本調査では「秋」を詠み込んだ琉歌 129 首中に改作琉歌が計 12 首あり、およそ 9%となっていることが判明した。

「夏」と「冬」春を詠み込んだ改作琉歌

以下に紹介する例は和歌ではなくオモロを改作した琉歌である。



オモロの大意：伊祖の戦思ひ様（英祖王）、立派な戦思ひ様が、月ごとに神遊びをして、千年も末長く、勝れた按司様を盛んに盛りあがらせよ。夏は神酒を盛り、冬は御酒を盛って栄えていることだ。
(重複オモロもあり→巻 15-106)

琉歌の現代語訳：伊祖の英祖王は夏はしげちという甘い酒で、さかもりを催され、冬は強いお酒で、さかもりを開かれて、お遊びになった。

この改作琉歌についてはすでに先行研究による指摘がある（外間 1965、金城 1974、世礼

1975、嘉手苺 1996)。また、似通った琉歌もあと 1 首¹¹見られ、「夏しげち冬や」という第 2 句を「夏過ぎて冬や」に変更している。「しけち」は、「神酒」(外間 2000、p.448)となっており、オモロから琉歌へ「しけち」→「しげち」のように伝わっただろう。また、「しげち」→「過ぎて」の変化については次のように考えられる。「しげち」と表記した表現を沖縄語で「シギチ」と発音し、その「シギチ」は、「シジチ」→「スイジティ」という「過ぎて」の発音に変化したと推定できる。オモロにおける「しけち」はそれぞれの改作琉歌において「しげち」或いは「過ぎて」のように変えられた。

「夏」「冬」を詠み込んだオモロの改作琉歌が 2 首あるが、和歌の改作琉歌も見られる。「夏」の場合は、和歌の改作琉歌が計 5 首あり、「夏」の琉歌 60 首中に 8%占める。また、「冬」を取り入れた和歌の改作琉歌が計 8 首見られ、「冬」を詠んだ全体の琉歌 48 首中で 17%を占める。

上記を踏まえ、季節語(春夏秋冬)を詠み込んだ琉歌 415 首中に、オモロの改作琉歌は 2 首のみ見られるが、和歌の改作琉歌は計 43 首あり、10%程度となっている。それらの 43 首のうち、特定の歌人によって詠じられた歌数と、読人知らずの歌数とがほぼ同数となっていることも分かった。この結果からは、琉歌は最初に特定の人物によって詠まれた歌であったとしても、時代の流れで一般の人々のなかにも普及したことが推定できるだろう。

5. 季節語を詠み込んだ改作琉歌に影響を与えた和歌集

季節語を含む改作琉歌を詠んだ歌人はいったいどの和歌集を参考にしたのだろうか。琉球士族が学ぶべき和文学を詳しく提示している『阿嘉直あかちよくしき識遺言書』(1776 年)によれば、主な勅撰和歌集、物語、随筆や藤原定家、為家、頓阿の歌書などが挙げられる(池宮 1976)。本調査の結果からも、四季を詠んだ改作琉歌の元となった可能性の高い和歌の過半数は有名な勅撰和歌集やその選歌資料、物語に編集されることが判明し、この記録を裏付けることになる。それらの歌集は以下の通りである。なお、1 首の和歌が複数の歌集に含まれている場合もあるので、歌数は延べ数である。

- | | | | |
|------------|-----|------------|-----|
| ● 『古今和歌集』 | 5 首 | ● 『新古今和歌集』 | 1 首 |
| ● 『新勅撰和歌集』 | 5 首 | ● 『後拾遺和歌集』 | 1 首 |
| ● 『新千載和歌集』 | 3 首 | ● 『風雅和歌集』 | 1 首 |
| ● 『玉葉和歌集』 | 2 首 | ● 『新撰和歌集』 | 1 首 |
| ● 『後撰和歌集』 | 2 首 | ● 『新後撰和歌集』 | 1 首 |
- 選歌資料：『宝治百首』(2 首)、『永享百首』(1 首)、
『嘉元百首』(1 首)、『延文百首』(1 首)
- 物語：『伊勢物語』(1 首)、『大和物語』(1 首)、『世継物語』(1 首)

また、季節語を詠み込んだ全ての改作琉歌の元となった和歌の初出時代を分析すれば、

¹¹ 『琉歌全集』1623 番歌である

最も多いのは平安時代の和歌（30%）、二番目に多いのは鎌倉時代の和歌（26%）であることが判明した。続いては、室町時代や江戸時代初出の和歌で、それぞれ22%である。

有名な勅撰和歌集や物語等だけではなく、他の歌書も調査対象に入れれば、改作琉歌の元となった和歌が最も多く含まれる歌集は『定家八代抄』（7首）、『明題和歌集』（7首）、『題林愚抄』（7首）、『類題和歌集』（7首）であることが分かった。したがって、改作琉歌の元となった和歌は、平安時代と鎌倉時代初出の和歌が最も多く、その殆どが当時有名な勅撰和歌集や物語などに含まれている歌であり、琉歌人はそれらの歌集や物語から直接学んだ可能性もあり得るが、むしろ同じ和歌を収めた『明題和歌集』『題林愚抄』『類題和歌集』のような室町時代や江戸時代成立の歌集を参考にした可能性が高いのではないかと考えられる。なぜならば、それらの歌集に含まれている改作琉歌の元となった和歌の殆どが、様々な勅撰和歌集の和歌と重なっているからである。多くの名歌がまとめられた『類題和歌集』などの歌集のほうが、改作琉歌を詠む際に参考にするには便利だったのではないかと考えられる。

6. 季節語を詠み込んだ琉歌と沖縄の日常生活

前章では第一に和歌、第二にオモロから琉歌への影響について述べ、それらの影響を強く受けた改作琉歌の例や琉歌人が参考にした可能性の高い和歌集を指摘した。四季を歌った琉歌は殆ど和歌の影響の下で成り立ち沖縄人々の日常生活から掛け離れた歌であるというイメージが与えられたかもしれない。確かに、有名な和歌を参考にしながら四季の概念やそれに適する表現を取り入れた琉歌はある程度和文学の知識人の世界のものとなり、沖縄から遠ざかったと言える。しかし、四季を歌った琉歌には、上述の改作琉歌や改作琉歌ではなくても「^カフル^クトク^ネサ^ミ」¹²のような沖縄古語に変えられている和歌の句を1・2句程度含んだ琉歌が多くある¹³にもかかわらず、中には沖縄人々の日常生活と結びついているものも見られる。ここではそれらの特徴について述べたい。

まず、沖縄人々の昔からの知恵を伝えた教訓歌という歌を紹介したい。教訓歌は、儒教の影響の下で誕生し、礼儀正しく、恥のない人生の生き方に関する「^ユシ^グト^ウ」¹⁴（教え）を重んじる琉歌であり、和歌にはこのようなジャンルは見られない。教訓歌には沖縄人々の考え方と価値観が色濃く反映されていると言える。「秋」を詠み込んだ次の琉歌には、秋の景色と共に沖縄人々の知恵も映っている。和歌にも秋の季節に眺める月や菊の光景を秋の代表的な歌題として詠んでいる歌が多いが、この琉歌から伝わる儒教のモラルが和歌には詠まれない。このように、和歌と同様に四季を詠んでいる琉歌ではあるが、和歌にはない沖縄独特の風味を感じさせている。

『琉歌全集』（2653）〔歌人：仲田朝棟〕

¹² 和歌においては「かはることなく」という7音句が見られる

¹³ 句ごとに分析をすれば、四季を歌った琉歌には、琉歌形式に合わせ沖縄古語に変えられた和歌の句が半分以上を占めていることが分かる

世界やぼたん花	(シケヤ ブタンバナ)
一方に向かへ	(イッポオニ ンカティ)
秋に眺めゆる	(アチニ ナガミユル)
菊や知らぬ	(チクヤ シラヌ)

琉歌の現代語訳：世の人々は、派手なぼたんの花にだけ一方的に向いて、秋に見る菊の花の美しさは知らないようだ。(徒らに華美を好む人心を皮肉った歌である)。

続いては、日常生活を反映しているものとして次の琉歌が挙げられる。この琉歌は「春」から「夏」に移り変わる状態を描いているところが和歌と共通している。しかし、このような場面には和歌に通常詠まれる「蟬の羽衣」や「白妙の衣を干す天の香久山」という表現の代わりに旧暦 4 月に沖縄風土に馴染んで咲く「デイゴの花」が取り入れられている。本土で親しまれる四季の内容や沖縄独自の風景と一緒に歌われる特徴は、この歌だけでなく、「ぼたん花」を詠んだ前の琉歌、「雪」と「蘇鉄」の不思議な組み合わせを含んだ琉歌など様々に現れ、沖縄の風土が人々にとって生活の場のみならず詠歌のインスピレーション環境としてもいかに大事であったか想像できる。

『琉歌全集』(232) [読人知らず]

春すぎて夏に	(ハル スイジティ ナツイニ)
立ちかへて咲きゆる	(タチカエティ サチュル)
梯梧の紅の	(ディグヌ クリナイヌ)
花のきよらさ	(ハナヌ チュラサ)

琉歌の現代語訳：春が過ぎて夏になってから、咲くデイゴの紅の花が美しい。

最後に、琉歌は沖縄生活の不可欠となったことについて述べたい。その例として、前述した春を詠み込んだ改作琉歌である特牛節クテウブシを取り上げる。琉歌はそもそも音楽と結びついており、大きく民謡や古典音楽に分けられる。琉球王国時代に宮廷で琉球舞踊と一緒に披露された古典音楽は中国の冊封使サツプーシを歓迎する役割を果たしており、また、国王の前でも演奏グジンフウイチブシされていた。特牛節も「御前風五節」という、琉球国王の前で歌われた五曲の中の一曲である。この琉歌は和歌の改作琉歌として和歌の典型的な「春」の内容やそれにふさわしい表現から強く影響を受けているものの、古典音楽の代表作になり、琉球王国時代から継承され、現在も様々なイベントで演奏されており広く親しまれている。

このように、琉歌は昔から今日まで沖縄の人々の生活の中に深く染み込んでいる。それゆえ、沖縄県を訪れる観光客や外国人を魅了する歌となっているのであろう。

7. おわりに

本稿では季節語と動詞・名詞との組み合わせの観点からオモロや和歌との比較において春夏秋冬を詠み込んだ琉歌への主な影響について研究を行い、表現の側面では琉歌やオモロ、和歌との具体的な共通点について述べ、琉歌はオモロより和歌との共通点が多いこと

を確認した。また、その影響をより一層明らかにするために和歌・オモロの改作琉歌の割合も示した。琉歌人が琉歌の改作過程の中参考にした可能性の高い和歌集を特定し、改作琉歌の元となった和歌の初出時代が最も多いのは平安や鎌倉時代であることが判明したが、琉歌人はその時代の勅撰和歌集や物語より室町・江戸時代成立の『類題和歌集』のような大歌集から学んだのではないかと、という可能性があることも指摘できた。四季の内容を歌った和歌由来の琉歌は沖縄の人々の生活から掛け離れている感じがしなくもないが、沖縄の人々の大らかなものの考え方が垣間見えてそれ自体がおかしみを誘うとともにそういう琉歌の中にも和歌的な表現と共に彼らの価値観、生活環境などとのリンクが色濃く見えるのである。

参考文献

- 池宮正治（1976）『琉歌文学論』沖縄タイムス社
- 池宮正治（1992）「万葉集と南島歌謡」『和歌文学講座 2・万葉集 I』勉誠社、367－385 頁
- 嘉手苺千鶴子（1996）「琉歌の展開」『岩波講座・日本文学史・第 15 卷 [琉球文学、沖縄の文学]』岩波書店、57－78 頁
- 嘉手苺千鶴子（2003）『おもろと琉歌の世界』森話社
- 金城朝永（1974）『金城朝永全集・上巻』沖縄タイムス社
- 日下幸夫 編（2010）『類題和歌集』付録 本文読み全句索引、和泉書院
- 日下幸夫 編（2010）『類題和歌集』エクセル CD、和泉書院
- 島袋盛敏、翁長俊郎（1995）『標音評釈琉歌全集』5 版発行、武蔵野書院
- 清水彰（1984）『標音校注 琉歌全集総索引』武蔵野書院
- 清水彰（1994）『琉歌大成』沖縄タイムス社
- 編集委員会（1996）『新編国歌大観』CD-ROM 版 Ver. 2、角川書店
- 世礼国男（1975）「琉球音楽歌謡史論」『世礼国男全集』野村流音楽協会
- 仲原善忠（1969）『仲原善忠選集・中巻』沖縄タイムス社
- 仲原善忠、外間守善（1978）『おもろさうし 辞典・総索引（第 2 版）』角川書店
- 比嘉実（1975）「琉歌の源流とその成立」『沖縄文化研究 2』法政大学沖縄文化研究所、97－142 頁
- 外間守善（1965）「琉球文学の展望」『文学』33 卷 7 号、岩波書店
- 外間守善、仲程昌徳（1974）『南島抒情 琉歌百選』角川書店
- 外間守善校注（2000）『おもろさうし 上・下』岩波文庫
- 三村晃功 編（1976）『明題和歌全集』福武書店
- 三村晃功 編（1976）『明題和歌全集全句索引』福武書店